

浄土

monthly
JODO



1999

1

January

法然上人鑽仰会



テレコムしよう。

 コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ  **0088-82** (無料)

〔受付時間〕9:00～23:00 (年中無休)

〈インターネットホームページ〉<http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

大樹寺

三河

寺院紀行

寺に歴史あり。

人々に信仰あり。

日本の、心の故郷を紀行する。

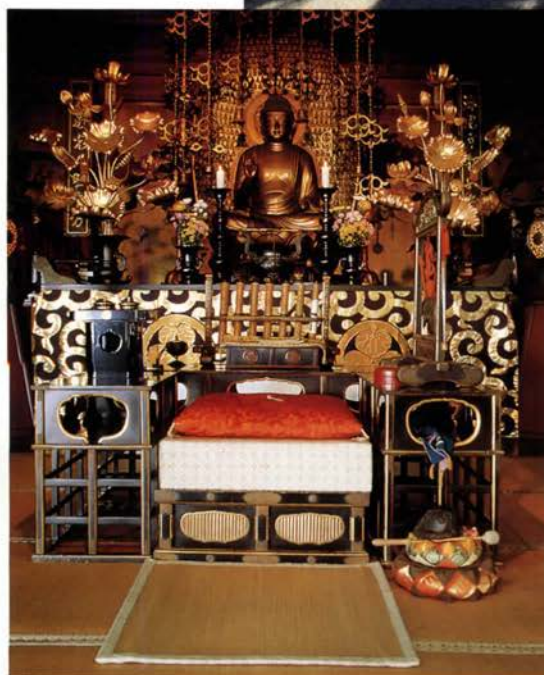


取材に快く応じてくれた大樹寺の檀家の皆さん。いずれも八十五歳以上で、大樹寺の歴史は住職よりくわしい



大樹寺山門。三大將軍家光建立て釈迦三尊像、十六羅漢像も安置されている

大樹寺本堂。間口十五間、
奥行十三間の大伽藍で、安
政四（一八五七）年に第十
三代将軍家定が建立した



光背に千仏を宿すことから一光千体
仏の別名を持つ、本尊阿弥陀仏



位牌堂に祀られる松平八代の位牌

徳川家康の位牌（左）と十三代までの位牌。位牌の高さが実際の将軍の身長とそろえてある。ちなみに家康の位牌の高さは一五九cm



三河 大樹寺

家康が生まれた岡崎城。三河の守護代西郷弾正左衛門回頼が康正元（一四五五）年に築城した



大樹寺創建のきっかけとなった井田野
の合戦跡に残る千人塚、首塚ともいう



天文四（一五三五）年松平七代清康
が建立した重要文化財の多宝塔



大樹寺第六十一世中村良親住職。
海外布教を三十八年され帰国、平成
九年十二月より大樹寺に入る



岡崎といえば八丁味噌。
老舗が二軒残っている

浄土

1999/1月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行「三河 大樹寺」	写真＝タカオカ邦彦	3
老子幻想	野末陣平	8
青年の心に灯を 総本山知恩院執事長インタビュー		16
表紙は語る	三浦功大	27
寺院紀行 三河「大樹寺」	真山 剛	28
連載 民間の伝統芸能と宗教 ③	川元祥一	38
現代の青少年と家族	村瀬嘉代子	44
御法語に聴く	袖山栄輝	50
コラム 仏教歳時記		62
Jフォーラム		63
誌上句会	選者＝増田河郎子	64
編集後記		70



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
 表紙撮影＝三浦功大
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

老 幻

野末
陣平

想 子

ばくの卒業論文は、「老子」に関する百枚のいたずら書きで、いま思い出しても、青くさく幼稚で恥ずかしいのだが、最後の結びの部分だけはなぜか、40数年たった現在でも、かなり気にいっている。当時の原文のまま引用してみれば、

「老子の思想は、学者によっていろいろに解せられているが、つきつめてみれば、そのどれもが宇宙生成論に氣をとられ、深遠な哲理とそれを盲拝するか、常識の逆を行く老子一流の処世術をありのままに受けとめて、それを利己的個人主義と批判するか、どちらかの立場に傾くようである。

しかし老子の超俗主義は（あえて老子に限らず世間一般のことであるが）立身出世主義の裏のあらわれにすぎぬことを見れば、この対称的解釈も、実は表と裏であることが理解できるのではないか。

老子の書は、片隅から文明に向かって、もう一度はじめからやり直せといったげに、無力な警告を発しつつける、欲求不満のひねくれ者のくりごとである。

老子は孤独でさびしい人格なのだ」

これは昭和28年12月に、早大の東洋哲学科に提出され、故福井康順師の指導をうけた。

福井先生は、

「これはキミ、学問じゃない。文芸だよ」

と批評されたが、まさにこれがばく流の老子の読みかたであった。

「道は隠れて無名」

であるべきことを主張しながら、無名の隠者に徹しきれず、つねに俗世間への関心と好奇心を失わなかった掬^すね者の二流インテリが、折にふれて口にした毒舌とばやきのかずかずをまとめたのが、すなわち「老子」という81章の薄い書である、とぼくは分析した。

「大道^{ずた}廃れて仁義あり」

「学を絶てば憂いなし」

「柔弱は剛強に勝つ」

「知る者は言わず、言う者は知らず」

「聖を絶ち知を棄てれば、民利百倍」

「正言は反するがごとし」

どれをとっても老子の言葉は、痛快で皮肉で逆説的で批判的で、世間の權威や常識に反抗してやまない、とくに孔子を代表する儒学者たちを標的にしていたことが、仁義や学や聖や知を否定したこと、から、ハッキリわかる。

「老子がなぜ、孔子の学派を目のかたきにして攻撃したのか」

この秘密は、すぐ解ける。孔子は不遇であつたが、当時の有名人であり、弟子たちも大勢いて、いわば儒家の權威であつた。思想家として市民権を得、かなりの影響力をもつ存在であつたらしい。

いっぽう、老子はどうか。この人物は実在せず、「老子」という書は複数の隠者たちの言葉を集めたもの、という学説をこのさい無視して、老子という一人の人物像をイメージに浮かべてみると、

「世に出たいのに出損なつた。輪の中心にいて脚光を浴びたいのに、世間がイマイチ認めてくれない。不本意ながら市井の片隅で、書物庫の番人に甘んじているが、実体は野心と出世欲をもてあます俗物で、日かげから陽のあたる場所へ出たくてうずうずしている。その内心のうめきと悶えが孔子への嫉妬や羨望となつて警句の形をとつたのではないか」

そう思えてならない。学生時代からそう思っていたが、この年齢としになつてますますその感を深くする。ぼく自身、国会議員を24年もやつて大成せず、

「おれはだめだ。ねたみ・ひがみ・やきもちの塊で、それが大成を妨げた。老子とそっくりじゃないか」

とヘンな自己満足で自分を慰める人間にとつて、老子はやはり、孔子などより遥かに親しみが持てる、愛すべき偉大な落ちこぼれなのである。老子の本音は、

「わしは頭もいいし、才能もある。しかし運に恵まれずに真ん中へ出て行けなかった。いまさらノコノコ出て行く気もない。ひっそりと隠れて無名なることを誇りに生きていく。

この世で才能が開花しなかった分、好き勝手に言いたいことを言わせてもらうよ。真ん中ではしゃいでいる奴のお粗末なこと、レベルの低さ、でたらめの言論、とても我慢ならん

わい」

ここまで開き直らなければ、かずかずの名言は生まれなかったに違いない。老子のコトバの裏には、だから、ドロドロした人間くささと、個人の力では今さらどうにもならない世の中の仕組みへのいらだちが読みとれる。

「せめて、孔子だけでなく、老子にも出番があればよかったのに」

と、ぼくはかつて夢想した。司馬遷の「史記」に記された孔老会見記は、あまりにもミエミエの作り話で、ちっとも老子らしくないから、ぼくには物足らなかったのだ。「史記」によれば、孔子が周に行き、老子に礼を問うたさい、老子は孔子に毒舌をかませる。「あんたの驕氣（思いあがり）と多欲（よくふか）と態色（俗世間への媚び・いろけ）と淫志（みだらなぞみ）を捨てなさい。そんなものはあんたに無益だ」

毒氣にあてられた孔子は、三日間というもの誰とも口をきかなかったが、あとで弟子たちに老子を評価していわく。

「あの人は龍のような存在よ。風雲に乗じて天に上るを知るあたわず」

まさに青年学究孔子と狸じじい老子の駆け引きだが、これは俗説だから、司馬遷のころすでに老子が神話化されつつあったことがわかる。でも、これじゃ老子が偉すぎて面白くない。

ぼくは老子に、俗世間へのいろけと野心がぶんぶんう活躍をさせたいと願っているの

だから、一段高くおさまった老哲学者の役割は期待しない。「史記」における老子の人物像は、枯淡こたんの心境に達した悟りの隠者に近い。

「これはちがう。老子は世間を捨てきれなかった俗物だ。往生際が悪い、中途半端な隠者としてのエピソードがなくては、老子らしくないではないか。少なくとも、ぼくの描く老子像が中国古典のどこにも登場しないのは不満だ」

「老子」を愛読し、その哲学に心酔するファンには、ひんしゆくを買いそうだが、ぼくはどうしても、老子イコール隠君子という通説をこわしたかった。

「論語」には孔子の言葉として、

「賢者は世を避ける」

とあるが、世間を逃避した賢者たちはたいい老人で、隠者になったあとは悠々自適の隠遁生活いんとんに入ることになっている。

しかし果たしてそうか。世を避けたあとほんとに悠々自適できるのか。隠者になったら尚のこと世間の様子が気になって、隠者でありながら凡俗の徒と同じ心境の乱れに悩まされるのではなかろうか。

中国にも、そういう人間くさいハンパな隠者がいたにちがいない。そう思いながら何気なく「論語」を通読していたら、いたのだ、隠者か。

とくに新発見ではない。読者諸兄ごぞんじの、楚その狂接輿せつよ（もの狂いの接輿、乱世をあ

きらめ狂人のフリをしている隠者？」とか、百姓に身をやつす長沮と桀溺、実にかれらこそあまりにも老子的な、悟りきれぬ隠者ではないか、と僕にはピンときたのである。

「こういう連中が、老子という書に盛られた言葉を常日ごろ、口にしていたにちがいない。それを集めたのが現在の老子だ」

勝手にぼくは結論した。「論語」によれば、狂接輿はわざわざ歌いながら孔子のそばを通りすぎ、「鳳よ、鳳よ、なんと徳の衰えたることよ。過ぎたことは諫めてもムダだが、これからのことはまだ間にあう。やめなさい、やめなさい。今の世で政治の仕事にたずさわるのは危ないことだ」

これじゃ気になる。孔子が車をおりてこの隠者に話しかけようとしたら、小走りに孔子を避けるので孔子は対話ができなかった。もし対話が成立したら、楚の狂接輿はこんな風な警告を発したにちがいない。

「むだな努力はやめなさい。いくら頑張ってもこの乱世はどうにもならん。どうにもならぬことを考えるのは、ムダなことだよ。早く見きりをつけなさい。まったくもう、今の政治に手をだすなんておめてたい人じゃ」

これは孔子への心からの忠告か、単なる皮肉か、それはどっちでもいい。本物の世捨て人の隠者ならノコノコ孔子の前に出てくることはないのに、なぜ孔子の目にとまろうとしたのであろうか。

隠者の、俗世への未練と孔子への妬みがこういういたずら心を生んだのだ、と思いたい。時の人孔子を、ほんのちよつとおちよくつてやりたい。それで溜飲^{りゅういん}を下げたいのが楚の狂接輿のパフォーマンスだった。

長沮と桀溺も、孔子の弟子の子路に対して孔子へのメッセージをそれとなく話した。

「とうとうと流れゆくのはこの川だけでなく、天下みなそうだ。誰といっしょにこの流れをかえるのか、この乱世を改めるのか」

なぜ孔子を無視しないで相手にしたか。かれら隠者は畑仕事をし、狂人の真似をしなから、実は吹っ切れていない。俗世間へのミレンたらたらで自分の出番を心の片隅で求めていたのだ。だからこそ孔子の通過を知り、隠れ切っていればいいものを、わざと目につくような場所へ現れて、充たされぬ自らの思いを、孔子に忠告する形で自己表現したのではないか。

これこそ、ぼくの描く老子像である。隠者になり切れず、俗物臭^{しやうくさ}を引きずって死ぬまで往生できない、悟った風な口をきいても魂の底では悟りきれない、そんな二流の知識人こそ、ぼくが好きな愛すべき隠者なのである。

ぼくは今こんな風に、勝手に老子を解釈し、それを自分に重ねあわせて楽しんでいる。

「老子」の読みかたとしては邪道であるが、これもまた古典を読む、ひねくれた楽しみではなかろうか。

(大正大学特任教授)

新春
特別

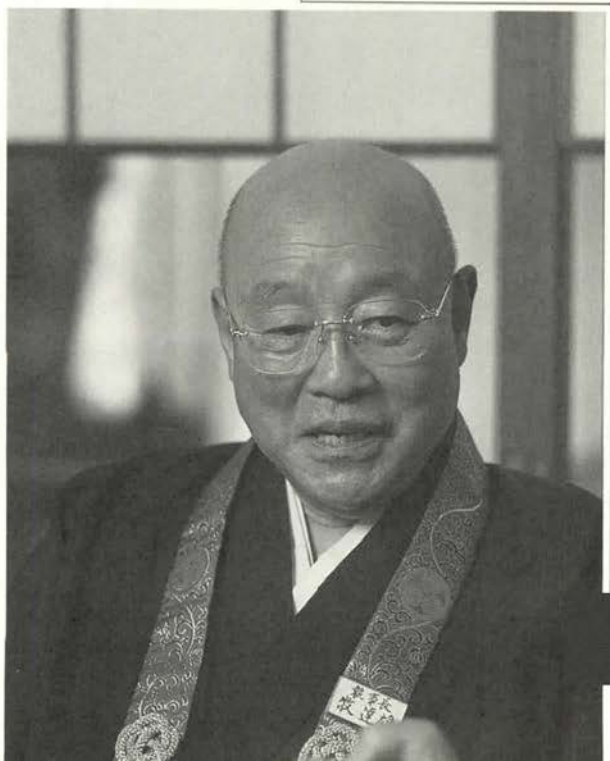
Interview

二十一世紀に向けてのおてつき運動とサラナ活動

青年の 心に灯を

牧 達雄執事長
総本山知恩院
に聞く

聞き手／本誌編集部
撮影／小堀祐二



◇ 本日はお忙しいところをありがとうございます。いよいよ今年が西暦1999年。何かこう押し詰まったな、いよいよ2000年かという気持ちになりますが、本日はその21世紀に向けて、知恩院が中心となって活動されています。「おてつぎ運動」と「サラナ」の活動について伺いしたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

本題に入る前に、昨年は『選択集』ほうたい奉戴八百年の年でしたが、法然上人のころについての執事長のとらえかたからお聞かせ願いますか。

牧 いきなり核心ですね。(笑)

一言でお答えすると、「包生的主体性」という言葉が法然上人のころのもつ最大の魅力でしょう。この言葉は広島文理大学教授の山本空外先生が板書された言葉なんです。

◇ 板書というと学校の授業ですか。

牧 ええ、わたしが旧制中学5年の時ですね。わたしはよく勉強しなかったけれど、不思議

とこの言葉は鮮明に覚えていますね。

◇ どういう意味でしょうか。

牧 わかりやすく言えば、広い心ですべてのものを包み込み、そして生かすということ、しかも主体性がはつきりしている。

懐の広さと深さがないと人間は色々なことを許せない、包み込めない。どうしたら包み込めるかといえば、相手の気持ちを理解することです。しかも自らの立場はしっかりしていて相手と同じ立場、同じ目線に立っての理解です。

◇ 法然上人の人間関係はとにかく広がったようですね。

牧 そうですね、天皇から武士、商人、庶民、遊女、そして盗賊まで、その人間関係はとても広がったようです。

◇ なぜ、それだけの人たちと付き合えたのか、法然上人の大きさを感じますね。

牧 法然上人が比叡山に登る時、仏教に何を求めていたか。実はそれまでの仏道修行者と

は視点が全く異なっていたのです。法然上人はすべての人が救われる道を求めていたのです。もうここでそれまでとは仏教への見方が違っています。

当時の仏教は戒を修めることがまず第一歩でした。これは凡人にはなかなか難しい。そしてどちらかというと当時の仏教は「法」を大切にし、その優劣にこだわっていた。しかし法然上人はすべての人が救われるか否かを求めているのです。この立場が人間を見つめる視線なのでしょう。

◇ なるほど。

牧 もともと仏教には自分を調（ととの）えるという考えかたと、ありのままの自分を見つめるという二つの考え方があります。法然上人は言わずもがなですが、ありのままの自分を見つめられた方です。

比叡山で智恵第一の法然房と言われながら自らを三学非器（戒、定、慧の修行にたえられない者）とした法然上人ですが、おそらく

三学の器か否かの基準を自身だけでなく、すべての人間において考えていられたのではないでしょうか。

◇ そうした基準を法然上人はいつ身につけられたとお考えですか。

牧 出家のきっかけとなった父の遺言はもちろん、法然上人は二十四歳の時に比叡山を降りて一週間嵯峨の釈迦堂に参籠（さんろう）しましたが、その時に庶民の心をより深く理解されたと思っています。

よく言うのですが、法然上人をわかるためには情感の世界で理解しないといけない。情感で理解して初めて法然上人の心が理解できるのではないのでしょうか。

◇ 法然上人は、人々の心を情感で理解していたのですね。

牧 ええ、そして同時に人の心をととても大切にしていました。たとえば親鸞が妻を娶ってよいかと聞かれて許されましたが、妻を娶るという親鸞の気持ちになって、同じ視点で見



たこと、同時に念仏を申すということの本質を見定めることができていたのだと思います。

法然上人は本質を見抜き同じ人間の目線で、誰とも接することができたのでしょうか。

◇ なるほど、法然上人の心をそうとらえると、またあらためてその素晴らしさに気づかれますね。それでは本題のおてつき運動に、牧 そうですね。今日の主題はそっちでしたね。(笑)

◇ おてつき運動は執事長をなされています知恩院の全国への教化活動ですが、^{まづ}名前の由来からお聞かせ下さい。

牧 おてつきは五重相伝の授手印^{じゅしゅいん}からきています。手から手へということですね。

◇ いつから始まった運動でしょうか。

牧 今年で三十四年目ですから、昭和40年ということになりましたか。

◇ どういった目的で始められたのですか。

牧 家の信仰から個人の信仰へ、という命題を掲げて始まっています。言い換えれば一人





ひとり信仰を持ちましょうということですが。たとえば日本人に「あなた個人の信仰するものは何ですか?」と聞くと、答えられない人が多いです。でも「あなたの家の信仰は何ですか?」と聞くと、すぐ答えられなくても「ええと、何だったかな」と考えてくれる人が多い。個人と家の信仰とがあやふやな関係にある。

◇ なるほど、つまり個人の意識の中で信仰を根付かせようというのが、おてつぎ運動の目標だったわけですね。いかがですか、30余年運動を続けてきた結果は?

牧 それが、なかなか難しい。(笑)

私自身も個人的には、信仰とはあくまで個人のものだと思っています。ですが、家の信仰の重さも立派にある。そして家の信仰があるほうが、むしろ個人の信仰も持ちやすいという面がある。

◇ 目標自体を見直す面もあるということですか。

牧 そうですね。おてつぎは初期の目的を達したか、ということでの反省は多々あります。長くやってきて初めてわかることですが、確かに信仰は個人のものです。個人の信仰はつながっていかない。逆に家の信仰はつながっていく。この違いがはつきり見えてくる。

◇ 個人の信仰というとき、若者が入る新興宗教が頭に浮かび、家の宗教というと伝統仏教が浮かびますね。

牧 そうなんです。おてつぎが本来目的とした中にはそうした若者へのアプローチも大切な目標のひとつだったのです。ただ聞くと、ころによりますと、若者が新興宗教に走るのは自分自身を見つめることをそうした教団に身を置くことで体得できるから、といいます。もちろんすべてがそうではないとは思いますが、先程述べましたが、仏教、特に浄土宗は念仏を申す中に自らを偽りなく見つめていくのですが、彼らには入りにくい所があるかもしれません。

◇ 次に、つぎ運動の具体的な中身を教えてください。

牧 最初の頃は個人の会員名簿がありました。いまはそれがなく、会員の所属する寺院の加入人数になっています。その会員数は13万人です。この2年で2万人増えています。

運動は大きく分けて二つです。ひとつは、おつぎ奉仕団で、所属する寺院単位で、知恩院に一泊二日でやっています。そして、別時念仏や法話、掃除をして頂きますが、年間一万人近くの方が来られます。

◇ すこい数ですね。

牧 一度来られると大変喜ばれて、毎年来られる方が多いです。東北や九州からも来られ、中には30年以上来られている方もいます。一年中いつでも見えていただいてもいいのですが、京都の夏と冬は暑さ寒さが厳しいので、どうしても春と秋が多い。(笑)

またおつぎこども奉仕団もあり、年間千人ぐらいの子供が来ています。

◇ なるほど、知恩院への奉仕の中で、法然上人のところに触れるということですね。

牧 もう一つの柱が本部からの伝道です。専用の自動車、伝道車に映写道具、今はビデオもあります。一式を載せ、全国どこへでも行って伝道する。

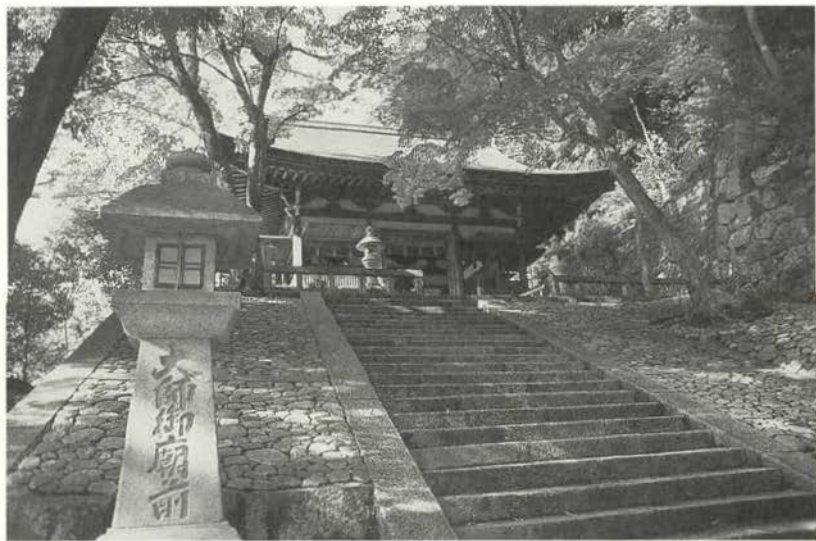
◇ 映画やビデオの内容はどんな物ですか。

牧 信仰に生きる人々の劇物語が中心です。昨年からはサラナ活動と関わりますが、「花光明」という沖繩の袋中上人の業績をたたえる新作になっています。

◇ 何人位でどこに行かれるのですか。

牧 2〜3人です。本部である知恩院から出発しますが、必ず知恩院の部長が一人つき、隊員と行きます。伝道隊員は会員の中の篤信の方で3年間の講習を受けた人たち、全国に800人います。この方たちは地方伝道の協力をして頂き、御忌会には泊り込みで奉仕して下さいます。行き先は全国寺院の要請に応じて決めます。現在は百日伝道といって、

年間百日を目標にしています。
◇ こういうのも失礼ですが、関東の会員は
多くないようですね。
牧 はい、そうなんです。なぜか地域差が
あるんですよ。そうしたこともあり、三年前
から始めたのがサラナという活動です。



◇ なるほど、その目的は。

牧 目的は外へ向けての知恩院のアピールです。おてつぎが浄土宗の檀信徒を対象とした根を培うものだとなると、サラナは一般の方特に青年層へのアピールです。

◇ サラナとはどういう意味ですか。

牧 やすらぎの場所という意味で、法然上人の教えをやすらぎとし、御廟を発信基地とする活動です。そして阪神大震災でボランティアとして活躍した若者たちと、オウム真理教に若者が多く関わっていたことがきっかけで、若い人たちにこの運動に参加して頂くためにわかり易く「メーキングサラナ」——花を咲かそう——とネーミングしました。

◇ 若者がキーワードですね。

牧 はい。ちょうどおてつぎ運動が30周年を迎えたこともあり、青年向けの運動をしようということになったのです。

◇ その「メーキングサラナ」の実際的な展開としては。

牧 一般の青年を対象にと学園祭のつもりで

やりました。18時間の不断念仏もしましたが、クラシックカー展示、演劇、バンド、寄席、展覧会、売店と確かにこれでは学園祭そのものです。(笑)

◇ 何人位の参加でしたか。

牧 1300人です。イベントとしては成功しましたが、おてつぎからはご批判もいただきました。

◇ 翌年は。

牧 私の地元の滋賀で行いました。そして昨年はまた知恩院で、今度は4000人集まりました。私が、その歌詞がまさに法然上人の心そのものだ、と惚れ込んだ「花」という歌の作詞、作曲者喜納昌吉さんのコンサートを本堂前で盛大にやりました。もちろん声明や色々な念仏、そして24時間の不断念仏もありました。京都市の支援もあり、テレビ局などのマスコミも来てくれて、本当に一大イベントとなりました。



◇ すごくイベントですね。

牧 ええ、でも中にはご批判もあります。まあ、それは何をしてもあるのてしようが。

◇ それにしても多くの若者を集められますが、何か秘訣は。

牧 私は福井生まれで小学校の2年の時に滋賀にきました。旧制中学を卒業し、佛教専門学校、今の佛教大学に入りました。その時に子供の教化を志し、他の大学の友人と一緒に日曜学校をやりました。動機は簡単で、学生ですし大人に説教はできない、子供なら大丈夫ということです。

そして卒業し、今度は大正大学に入りました。そして軍隊へ。青年運動を始めたのは軍隊から戻ってからですね。

多くの先輩がいましたが、一緒に仏教青年会運動を始めました。青年といっても寺の青年ではなく、地域の青年を対象にした運動です。しかし、少々あばれ過ぎまして、勤めていた学校を追ひ出されました。(笑)

◇ 執事長は立派な体格ですから、あばれたら怖い。(笑)

牧 それで学校を変えました。そこでボーイスカウトをやりました。今思うと、これが私の青少年運動の理論やノウハウの基礎を作りました。

◇ ボーイスカウトを通じて感じることは何ですか。

牧 そうですね、ボーイスカウトは人間作りですね。同時に世代から世代へとつなげていく、まさにおてつぎ運動につながるところがあります。

ボーイの中学からシニアの高校、そしてローバースカウトという青年、22歳までで大学生や社会人。リーダーになると25歳まではローバー隊にいられます。

そしていつもマンツーマンで行動します。あくまで助言者の立場でいて、キャンプで奉仕活動を語り、生きることを語る。ボーイスカウトに入っていた中からリーダーが育ち、

そのリーダーがまた次のリーダーを育てる。

◇ ボーイスカウトの何にひかれますか。

牧 自然が文化の害毒を洗ってくれることでしょう。これに尽きる。

◇ この一月に出版される水谷幸正先生記念論文集に宗教教育のことを書かれたと聞きますが、やはり青年指導とつながるものですか。

牧 はい。宗教教育の重要性はいまさら言うまでもありませんが、信仰の大切さを伝えなくてはいいけません。自分の信仰を語ることで、相手にも信仰というものがよく伝わる。

若い人と話す時もそうですが、自分の問題点と相手の問題点の共通点を持つことが必要です。そして肝心なことは単に自分の体験を語るのではなく、その体験を普遍的な問題として自分で絞り込むことです。信仰の体験もそのままでは、そうちよつと鼻につく。(笑)

◇ なるほど。

牧 日本の教育は明治32年に神道を除いて、宗教教育を排除しましたが、これは間違いで

した。教育は一度道を踏み外すと直すのに数百年かかるというのが持論ですが、日本は宗教とは何か、を知らない国になっている。

これが21世紀への最大の課題でしょう。

◇ 本日はお忙しい中、大変ありがとうございました。



今月の表紙

真如蓮

蓮

LOTUS

1 月

池の中に蓮華あり
大如車輪
青色には青光あり
黄色には黄光
赤色赤光
そして白色には白光ありて
微妙香潔なり
舍利弗よ
極楽国土には
かくの如くの
功德莊嚴が成就される

蓮華

この不可思議
たとえ七寶池八功德水なくとも
小さな泥田に
咲く
美しく咲いて
いる

表紙写真と文

三浦功大

蓮豆知識

蓮はハス科(Nelumbonaceae)ハス属(Nelumbo)に属する大型の抽水植物。植物学的にはハスは、赤、白の花の東洋産種(Nelumbo nucifera)、黄の花のアメリカ種(Nelumbo pentapetala)、赤の花のロシア種(Nelumbo caspicum)の三種がある。(かつてはスイレンと同じスイレン科だったが、スイレン科の他の属と大きく異なっているため、今日ではハス科として独立している)。ハスは化石から中生代白亜紀(一億三千年～六千万年前)には、地球上に存在していた。

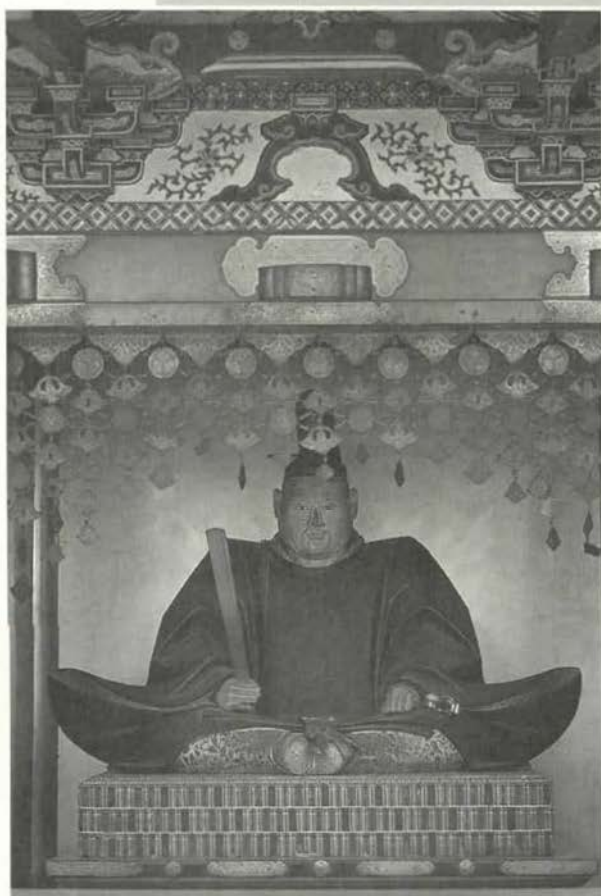
1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の話」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文華史」(カド館)などがある。

寺院紀行

三河

大樹寺

大樹寺位牌堂に祀られる徳川家康木像



文／真山剛
撮影／夕力才力邦彦

「家康公は生きています。何百年経っても生きています」

檀家総代の岩槻さんのこの言葉に、わざわざ集まってくれた他の檀家総代も皆うなずきながら、口々にこう繰り返す。

「そう、家康公は生きています」

ここは愛知県岡崎市の大樹寺^{だいじゅじ}。二百六十余年に及ぶ江戸時代を築いた徳川家康が十九歳の時に逃げ込み、先祖松平家墓前で自刃しようとした寺である。

時の住職第十三世登誉上人は自ら命を断とうとした家康に「名將ほど命を重んじるものである」と戒め、「厭離穢土 欣求淨土」の旗を掲げ寺内の僧衆とともに追ってきた敵兵と戦いを挑んだ。そのかいあって家康は無事岡崎城にたどり着く。時に永祿三(一五六〇)年五月二十日の出来事だが、以来家康はそれまでの人質の身から自らの意志で動く武將となり、天下を治めることになる。

平成九年十二月から大樹寺第六十一世住職となられた中村良観上人は家康と大樹寺の出会いをこうとらえている。

「今川氏の武將であった家康は、桶狭間の合戦で今川義元が信長に急襲され討ち死にの報を聞き、松平家の先祖が祀られているこの寺に逃げ込み自刃しようとしていました。結局、住職にとめられ家康は三日この寺にいました。その間に家康は何を見、何を聞き、何を思ったのか。それはわかりません。ですが、十九歳ながらおそらく家



大樹寺創建にあたり松平親忠は先祖三代の墓を移し、廟所とした

康は仏の教えの中に平和の真髓をつかんだのではないでしようか」

徳川家康は天文十一（一五四二）年十二月二十六日、松平広忠と水野氏の娘於大の長男として岡崎城内に生まれた。幼名を竹千代といい、三歳で母と生き別れ、六歳で織田氏の人質となり八歳で父と死別、今川氏の人質となる。十四歳の元服にあたり今川義元の元の字をもらい、元信と改めた。そして結婚、初陣のあとに武名の誉高かった祖父松平清康の康の字をもらい元康と改名。桶狭間の合戦後、十二年におよぶ今川氏の人質生活から脱して、今川義元からもらった元の字を家に変え家康となった。さらに三河一国の支配者となったのを機に姓をそれまでの松平から徳川に改めた。

竹千代↓元信↓元康↓家康と名前を変えてきた家康だが、大きな節目は何と言っても長い人質生活から解き放たれた時だろう。桶狭間の今川義元討ち死をうけ、自由となったその身を最初に置いたのが、この大樹寺だ。

自刃を思い断ち、取り囲む織田軍と戦かわんと家康が勇んで二太刀いれた貫木や、「厭離穢土 欣求浄土」の旗を境内に何本も立て、敵を威嚇したというその時のエピソードは多々ある。が、最も興味深いのは中村住職が言うように、わずか数日の滞在ながらこの大樹寺で家康が一体何を悟ったかである。

大樹寺の大樹は天下人を意味するもので、創建した松平親忠は戸



山門を背に記念写真を撮る観光客。左右ののぼりには厭離穢土 欣求浄土と書かれている

悪いながらも子孫に天下人の現れんことを祈って命名したといわれる。当時の家康にこうしたことが伝わったか否かは知る由もないが、今川軍が岡崎城から引きあげるまでの間、一体この大樹寺で住職登營上人と何を語ったのか、あるいは先祖が眠る墓の前で何を思ったのか、今も本堂正面の柱に立てられている「厭離穢土 欣求淨土」の旗に何を感じとったのか、興味が尽きない。

家康はこの大樹寺を後にし、岡崎城に戻り三河を平定、やがて天下を手中にするのだ、こうした家康とともに大樹寺は安城松平氏の菩提寺から徳川家の菩提寺として大いに栄えることになる。

では、まずその創建からたどってみよう。

成道山松安院大樹寺は安城城主松平親忠が勢登愚底上人を開山として招き文明七（一四七五）年に創建した名刹である。創建のいきさつは応仁元（一四六七）年親忠と近郊武士との井田野の合戦の戦死者を葬った千人塚に九年後になって戦死者たちの亡魂が騒ぎだし、塚が鳴動、悪病が流行した。

そこで親忠は塚の隣に念仏堂を建て、碧海郡宇都郷福林寺の住職愚底上人を招いて七日間の別時念仏を修し、その功力で戦死者たちの魂を鎮めた。その念仏堂は鴨田西光寺となったが、親忠は菩提寺として大樹寺を建立、愚底上人を開山としたのである。

愚底上人は了曉上人の弟子で、了曉上人は茨城の飯沼弘経寺の住



開山愚底上人の木像。愚底上人の果たした役割ははかりしれない

職だったが文明十二（一四八〇）年にこの三河に移住し新宮山に大恩寺を開いた。この大恩寺が十年後に現在の御津山に移転した時に親忠が大檀那として本堂、諸堂を建立している。そうした縁で愚底上人が開山となったのである。

その愚底上人は当時二十九歳。以後三十年にわたり大樹寺の住職として寺基の確立と弟子の養成に力を注いだ。

その間師了暁上人の立場を弁護し論争したり寺内法度を定めたり、寺領拡大に心血を注ぎ、また親忠に浄土宗の教えの要を伝える結縁五重をするなど、多くの功績を残した。そうした愚底上人に弟子たちは生きているうちに作られる寿像を作った。今も残るその像は県の指定文化財だが、愚底上人五十四歳の時である。

三十年住職を務めた愚底上人はその後京都東山知恩院の住職となる。二十三世となった愚底上人だが、なぜ大樹寺から呼ばれたかにはわけがある。当時知恩院はまだ天台宗寺院の管轄下にあり、法然上人が茶毘に付された地として浄土宗鎮西派ちんさいはの寺院であった。

いまでは浄土宗という呼び方となっている浄土宗鎮西派だが、かつての浄土宗はいく派にも分かれていた。後述するが大樹寺のある三河も鎮西派の飯沼法流いひぬまほうりゅうが入ってくるまでは西山深草派せいそうはふくくさや藤田派の地であったのである。

その知恩院の第二十一世となったのが慶竺上人で、増上寺を開山



山門前の岡崎市立大樹寺小学校、奥に見えるのが総門だ



將軍御成りの間の襖絵は冷泉為恭の
大作で、四十六面ある。他にも百面
が残されている



寛永十八（一六四一）年三代將軍家
光建立の鐘楼。大鐘は九代將軍家重
改鑄の名鐘だ

した関東の聖聰上人の弟子であった。慶應上人は知恩院第二十一世となったのである。続いて第二十二世となったのが了暁上人の弟子の珠琳上人。こうした流れの中で愚底上人が呼ばれたのである。

愚底上人は知恩院住職を八年間務めたが、資料が全く残っておらずその活動はわからない。そして再び大樹寺に戻るようになる。知恩院第二十四世も同じ三河飯沼法流の訓公上人で、このように知恩院と三河の飯沼法流の関係は続き、現在も大樹寺の住職が総本山知恩院に上がっている。ちなみに最近では大樹寺第五十八世藤井實應住職が知恩院門跡となっている。

大樹寺に戻った愚底上人は隠居したが、再度式定制度に携わるなど、七十三歳で遷化するまで精力的であった。さて、知恩院と三河の関係に触れたついでに、中世三河の仏教各宗の状況を見てみよう。もともと三河で盛んになった宗派は浄土真宗と時宗であった。親鸞は関東での二十余年の布教を終え、京都へ戻る途中にこの三河の矢作で説法を行い門徒の基礎を作った。また、時宗は開祖一遍の弟子他阿真教が弘安五（一二八二）年に三河に光明寺を建立、一遍もここで民衆を教化した。そこに臨済宗、日蓮宗が続いて入り、少し遅れて曹洞宗、浄土宗が入った。

浄土宗ではまず西山深草派が興隆し、三河に十二本山を構えている。鎮西派は先の信光明寺に始まる飯沼法流だが、藤田派や名越派



松平徳川家総氏神の伊賀八幡宮。東照大権現崇拝の霊廟との三大將軍家光の朱印状で別格の扱いとなった

もそれ以前にこの三河に入っている。

こうしてみると鎮西派の知恩院が、大永三（一五三三）年に朝廷から総本山の地位を認められるまでは、浄土宗は各派各寺院が独立している様であったのかもしれない。

このように各宗派が入りこんだ三河だが、松平氏のルーツを探るとこれがまた僧侶と結び付くのである。松平氏は三河武士の中に突然台頭した新興武士であった。もともと三河は足利氏の力が強かった。室町幕府の直轄領であり、かつ將軍に直接仕える奉公衆が全国で一番多かった地である。いわば足利氏の臣下の基盤だった。

ここに松平氏が登場するのは十五世紀中頃で、加茂郡松平郷から始まる。松平氏の初代は親氏、続いて泰親、信光から大樹寺を創建した親忠、長親、信忠、清康、広忠、と続き、家康が登場する。

初代親氏は源氏の末裔で、上野国新田郡徳川郷へ住したといわれるが真偽は定かでない。また、親氏はこの三河の地に徳阿弥と称する時宗の遊行僧として入ったといわれている。その後、松平郷の松平太郎左衛門の娘婿になり、やがて秀でた武芸で一族の礎を築いた。時宗の遊行僧から始まった松平家が浄土宗の寺院を創建、子孫がその寺の住職に救われて天下取り。こう言う徳川松平中心史観のそしりは免れないが、浄土宗と深い関わりを持ったのは史実である。

昭和五十八年、NHK大河ドラマで「徳川家康」が放送された。



名鉄東岡崎駅。岡崎城や矢作川からすぐだが、大樹寺からは約4キロの距離がある

大樹寺は参拝客であふれかえったという。取材に応じてくれた総代さんたちも当時の忙しさを昨日のように覚えている。そして参拝客のおかげで懸案の本堂の屋根が修理され、また平成四年の岡崎市主催の家康公生誕四百五十年祭で徳川將軍松平位牌堂が建立された。

徳川時代から明治となり徳川家菩提寺だった大樹寺は辛酸をなめ、経済的には苦しい時代が続いたという。最近では墓苑の売り出しや、観光客も来るようになり何とかやっていけるようになったが、決して楽ではない。だが、冒頭の総代さんの言葉ではないが、いまだに家康が大樹寺を応援してくれているのも間違いない。

毎年四月の第一土曜日に行われる家康祭りでは、一般から家康を募集して行列するという。その家康役となった人たちのOB会がある。家康として大樹寺本堂に昇殿、焼香する時の気持ちは格別だという。また「徳川大樹会」と呼ばれる後援団体もある。まさに、家康の菩提寺への思いのなせるわざかもしれない。

「この寺はある意味で人を拝む寺かもしれませんが」住職は最後にこう結んだが、同時に「まさに家康が平和の真髄をつかんだこの寺から、仏教的な平和へのメッセージを世界に向けて発信したい」と願う。海外布教が長かった中村住職がその思いを、歴史あり、伝統あり、そして家康ありのこの寺とどう結び付けていけるのか、楽しみである。

(ルポライター)

民間の
芸能と宗教
伝統芸宗③

連載

政治権力を 批判した門付芸

伝統芸能研究・千町の会代表作家

川元祥一

一、ちよんがれ節とは

みなさんは「ちよんがれ」という歌があるのを知っているだろうか。富山県の北部の地域や石川県能登半島の海沿いの一部地域の人々にはいくらか親しい歌であるかも知れないが、全国的に見るとほとんど知られていない歌なのだ。しかも、たとえ知っている人であっても、それが全国的に広がっており、江戸時代末期から明治、大正時代を通して、大衆的人気があったことを知る人は少ない。富山県や石川県の一部の人々にとっても、彼らはその歌や踊りを楽しみなが、それが全国に広がっていることを知る人はほとんどいない。私は群馬県や富山県、石川県や愛媛、高知などで「ちよんがれ」を歌い踊る人をたずねて歩いたが、それらの地域のほとんどの人が「ちよんがれ」は自分たちの村や町にだけ伝わるめずらしいものと考えていた。それほどまでに忘れられ、目立たなくなった歌なのであるが、その地域では非常に大切にされて

いる。大切にされる理由は地域によって多少の違いはあるが、主には、その歌が民衆の立場に立ってその時々の権力者の不正や、政治的矛盾を歌ったからである。そして、この歌は多くの地域で農民一揆の情宣に使われたのである。

「ちよんがれ」節には歌だけでなく踊りもあって、全国的には門付芸として行われた。しかも、それを全国に広め、演じたのは「願人坊主」と呼ばれた宗教者だ。

宗教者としての「願人坊主」をどのように意味づけたらよいだろうか。仏教者として京都鞍馬寺大蔵院に統括されていたとはいえず、特別宗派が決まっていたわけではなさそうだが、しかも神道としての伊勢代参なども行っていたので仏教だけで生きていたとも見えない。江戸時代末期の江戸では「僧形にて妻子もある乞食坊主」などと書かれている。

彼らの身分は「平民」である。しかし江戸では神田や芝網町、四谷にあった「非人」の居住地に同居し、その娘と結婚した者も

いる。門付芸というのは当時から「乞食芸」として偏見をもたれており、制度的にも賤民の芸であった。「願人坊主」はそのような被差別者と一緒に生活し、門付芸をして歩いたのである。

寺檀制度に束縛されていた当時の各宗派（今ていう伝統的教団）が「願人坊主」をどのようにに見ているのか知らない。是非一度意見交換してみたいと思っているが、私はこの「願人坊主」は日本の仏教史にとって特筆すべき存在だと思う。伊勢代参などやっているからまともな仏教者でないという意見があるかも知れないが、これまでも見たとおり、伝統的教団も神道の呪術にまつわっている。だからそのことをもって「願人坊主」を仏教者から切り離すことは出来ないだろう。ともあれ、このようなことを考えながら「ちよんがれ」節を見てみよう。

二、幕府を批判して追放された

江戸時代末期の江戸の「願人坊主」がどん

な歌をうたい、どんな姿であつたか少し見ておきたい。

当時彼らが歌い踊った歌に「アホダラ教」というのがある。この歌も明治・大正時代に流行つたのであるがこれを歌にして歌つたものが「ちよんがれ節」なのである。その歌詞のひとつに次のようなものがある。天保時代に幕府が行なつた「天保の改革」を批判した歌だ。しかも天保の改革を施行した老中水野忠邦を直接、リアルタイムで批判するのだ。なおカッコ内は私が説明したもの。

「ヤレヤレ引私欲（私欲に引かれて）上ウ来抑々水野（水野忠邦）が工風を聞かねへ、する事なすこと、忠臣めかして、御時節だの、何のかのとて、天下の政事を、おのが氣儘にひっかき回して……（略）」（「乞胸と江戸の大道芸」高柳金芳・柏書房）

歌詞の一部であるが、権力者への批判はするどい。批判している権力者の姿が現代の政治家にも似ているからよけいに興味がわく。

しかも彼らは当時の「非人」身分の人々と



一緒に門付してまわったのである。門付というのは民家を一軒一軒まわって芸をして御祝儀をもらう。つまり彼らは権力を批判しながら大衆に支持されたことになる。

このような「願人坊主」は残念ながら幕府権力から弾圧された。その弾圧の文章によって反対に彼らの生き様がわかる。

「願人共作法近年猥ニ相成、連立、市中其外踊歩行、三衣も不着、頭を包、又者裸ニ而、家々之門口ニ而押而施物を乞、往来之妨をなし、其上謠奔戯譁を唱……(略)」(江戸社会と弾左衛門 中尾健次・解放出版社)

現代文に直すなら次のようになる。「願人どもは最近作法がみだりになり、連れ立って、市中そのほかを踊り歩き回る。法衣も着ず、頭を布で包んだり、又は裸になって民家の門口に立ってほどこしをうけている。交通のさまたげをなし、そのうえ人の悪口や噂を歌っている……」

先に引用した「ちよんがれ節」で歌われた「アホダラ教」の権力批判と、権力が「願人

坊主」取締のために出したこの御触を見較べると、「非人」たちと共に権力を批判する「願人坊主」と権力者の対立構造がストレートに見える。「謡奔戯諧」とはまさに老中水野忠邦の悪口のことなのだ。

このような「願人坊主」を考えると、江戸時代に厳しかった身分差別を超え、被差別者と共に生きながら権力や政治の不正を批判する、日本では非常にめずらしい精神の自由と空間の自由をもっていたことがわかる。そしてこのような仏教者がこの国に存在していたことをしっかりと認識し、その精神を生かすべきではないか。

三、今も残る「ちよんがれ」

このような「願人坊主」は江戸幕府によって江戸市中から追放される。その後彼らがどのような生活になったか詳しいことはわかっていない。しかし、全国各地に「ちよんがれ」が残っていることからして、江戸を追放された彼らのその後の姿がわかる気がする。



もつとも「願人坊主」は江戸にいたただけではない。「愛宕・多賀の願人」「羽黒の願人」「淡路の願人」がいたといわれるので、江戸の「願人坊主」の影響だけともいえないが、江戸幕府が行った「市中、そのほか踊り歩き回る。法衣も着ず、頭を布で包んだり、又は裸になつて……」にそっくりの踊りも残っているのだ。

富山や石川県の一部の地域では「ちよんがれ」節は盆踊りと同じように考えられている。特に一向一揆発祥の地といわれる城端地方では蓮如や仏を尊ぶ歌が多い。

秋田県の八郎潟には「願人踊」が残っていて今でも門付をしている。八郎潟の踊は江戸のものとして少しちがっている。この踊りの所作は豊年の稲刈を表しているのではないかとする説があり、やはり民衆につながっている。

京都の福知山、愛媛の宇和島では「ちよん

がれ」節が農民一揆の情宣に使われたり、一揆を起した農民の精神を歌い、他地域の人々に知らせようとしていたりしている。

福知山のその歌詞を少し見ておく。

「これさ皆さん聞いてもくれない。おらが隣りの其又隣りの、丹波のお国の福知の城下で、強訴と名づけて騒動大変、其元あらまし尋ねてみたれば（略）あほうの役人四五人出掛けて（略）色物（そめもの）あきない五分だの一割取立。（売上税と同じ）下の難儀を知らなかなしさ、だんだん不道の政治増長……」

この歌詞の内容も現代に似ている。しかも表現の自由をもつ現代、「ちよんがれ」節のこの精神を日本人はもっているだろうか。

歌詞の方も、武士に斬られた農民がいて、その農民の娘が敵としての武士を打つ話なのだ。

現代の
青少年と
家族

村瀬嘉代子

一 はじめに — 見えるものと見えないもの —

昨今、中学生による過激な事件が続発し、子どもは変わってしまった、分からない、という声が世間ではもっぱらである。なるほど、子どもをめぐる最近の家庭、学校、街頭などで生じている現象を見ると、理解しがたい即行的な激しい攻撃行動、援助交際を始めとする倫理観の欠如した自分を大切にしない行動傾向、安易にシンナーを超えて、一気に覚醒剤に親しむなど、確かに一種不気味な感否めない。

しかも、大人が困惑させられるのは、「キレイなブツンした」と思ってもよらない過激な行動に突如として走る子どもが、平素から如何にも荒れているというわけではなく、むしろおとなしく勉強もほどのよい子であることや、いわゆる中産階級で、経済的に逼迫しているわけでもない少女が自分の性を安易

に商品化することなどであろう。

私は講義の傍ら、大学付属のカウンセリング研究所で様々な相談を受けているが、確かに近年、児童・青年の来談者に情緒の変動が激しく、すぐ行動化に及ぶ傾向が顕著に見られるようになってきた。ただ、彼等の気持ちの内面に触れると、心の底では、人に受け容れられたい、自分の力を相応に発揮したい、そんな自分を他者に認められ分かち合いたい、という願いが息づいているのに出会う。子どもの行動の外に顕れる部分は確かに大きく変わっているが、心の底の本質の部分は変質していないといえよう。ただし、現代の子ども心の本質に出会うには、深井戸の水を汲むように容易ではない。根気強く、子どもを見捨てない、という姿勢が求められるのである。われわれ大人に、目に見える、直接触れることの背景に潜むものと思いを巡らすゆとりがあるだろうか。大人も昨今の速度を重んじる情報化社会の風潮に流されて、諦めがよくな

りすぎ、「ああ、もうこの子は・・・」と内心
早々と見捨てることをしていないであろうか。

二・時代の閉塞感

文明の進歩は大きな利便性を与えてくれは
したが、一方でわれわれは前例に頼って答え
を見つけるわけにはいかない難問に遭遇する
ことになった。さらに生殖技術の進歩は、親
子とは、家族とはどう規定されるのか、と
いう問いをもたらしに至り、人類史上先例の
無い倫理観を問われる問題に遭遇しているの
が現代である。

大人は価値観の変換を問われ、しかも将来
の展望が見えにくいという閉塞感にとらわれ
て、自信を弱めている。その自信の乏しさの
裏返しとして、表面は一見優しげに子どもに
迎合するように振る舞ったり、あるいは子ど
もの言葉に素直に耳を傾けるゆとりを失って、
自分の見解を一方的に押しつけていないだろ

うか。

一方で、相手に対してどう働きかけるか、
他者の気持ちをどう汲み取るか、状況や相手
に依じての振る舞い方がわからない子どもが
増えている。そもそも人間の感受性は、きめ
細やかな他者からの働きかけと、日常生活で
の具体的経験を通して会得され育っていくも
のである。ところが、現代の日常生活では、
そういう機会はめっきり減ってしまった。少
子化で自分より小さい子の世話をするという
機会も乏しく、集合住宅では動物飼育もまま
ならない。「たまごっち」の飼育体験は全くの
擬似体験でしかない。対象にじかに触れて、
そこから自分で考え工夫し抜いていくという
態度を養うこと、一方で、機器を上手に活用
して能率を上げる、つまり文明の利便さを生
活の中に活かすこと、この一見矛盾する課題
に対して、どう適切にバランスのある態度を
とるか、難しい問いが投げかけられている。

三、現代に父親であること 母親であること

平素の臨床的経験を通して感じるのは、人間の精神的成熟が寿命の延長につれて遷延化してきたことである。よく表現すれば、若々しいとも言えるが、次の世代を育む上で何かもの足らなさを感じさせられることが多い。その原因としてはまず、親の世代と子どもの世代の精神的境界が曖昧になったことが挙げられよう。夫婦が確かな横のつながりの絆で結ばれ、自分たちは子どもをどう育てたいか、育てるべきか、という共通認識が不十分な場合が多い。父親は外の世界の過当競争に脅かされ、家族の中での存在感が薄れ、母親と子どもの密着関係が生まれやすい。母親の過干渉は子どもの自律性を損ない、子どもが母親との関係から自立していくことにためらいを持つようになりがちである。

基本的に子どもの存在を善し、と受け入れ、

その上でその子どもの心身の発達状態に応じて、人やものへのかかわり方を会得させていくこと、つまり慈しみながらも、時に危険なことや、人としてあまりにも自分本位な行動には、はっきりノーと教えることである。良質の愛情とは、子どもの欲求を出来るだけ叶えることではなく、その子に今、何が必要か、どうそれを伝えたらよいか、という理性に裏打ちされたものでなければならぬ。

現代は男女の役割が分化されず、男性らしさ（父親らしさ）、女性らしさ（母親らしさ）というジェンダーイメージを描きにくい時代となった。父なるもの、母なるものをどのように確かなものとして、自分の内に確認し、それを子どもに伝えるのが、今、われわれ大人に問われている課題である。

四、子どもが求める 心の拠り所としての父母像

百花繚乱の観のある多くの家族論は、当然

のことながら壮年期の大人の立場で論じられている。家族成員であつても、そして次の時代を担う存在であるのに自ら声をあげない子どもたちは一体、どのようなことを家族に期待しているのだろうか。就学前の幼児から大学生まで、合計464名に投影法を加味した個別面接で父母像、家族像について3年間にわたる調査を行った。

結果として、意外であつたのは、子ども達はいよい意味で保守的であつたことである。現実の彼等の家庭生活の人間関係のありかたが、必ずしもそうではなくとも、望ましい家族イメージとして、父親にはよき權威と保護、大きなものごとを決断し、リーダーシップを取るイメージを、母親には、家族の人間関係をさりげなく円滑にいくようにフォローし、心身の弱つた時の救護者のイメージを抱いていたのである。さらに、上記のように、両親の夫婦としての理想の関係を、良い意味での「夫婦随」もしくは「協同型」とし、理想と現

実が一致している子どもほど、生活気分が安定し、適応状況も良好であり、大人になることを前向きに楽しみに捉える傾向が顕著であつた。

また、大人になつて大切にしたいものとして「家族・家庭が人間生活の基盤である」とした答えが多かつたことも特徴として挙げられる。これらの調査結果は、私が平素の相談面接活動の中で、思春期・青年期のクライエントが語る内容から感じとることと全く一致している。

五. 知識と生きる知恵

前述したように、成長途上にある子どもが内心で求めることに、的確に応えるには、時代の転換期にある大人にとっては、難しい課題が山積している。文明の進歩とは、皮肉なもので、物理的利便さを人間に与えてはくれるが、どう生きるか、ということに関しては、

画一的なマニュアルなどなく、各自が考える他ないのであろう。そもそも、家族生活とは、人に生きる基盤、精神的居場所をもたらしものではあるが、それに期待されている機能は、次のように矛盾した内容を含んでいる。

甘える、憩いの場である

▲対▼

成長と社会化の場であり、しつけが必要

家族構成員は性別、年齢にかかわらず、安全で親密な関係、自由に素直に感情表現できる

▲対▼

家族構成員はそれぞれ人格を認められ、侵襲的でない適切な距離を保つ

発達段階の必要性、欲求に応じた役割とそれを発揮する場が与えられること

▲対▼

役割分担は状況に則した理に叶ったものであること

その家族らしい独自の分化や価値観をもつ

▲対▼

「その家族」は閉じられたものでなく、社会に向かって開かれ、外の世界の準拠枠にもほどよく適合する

さて、こう見てくると、家族生活というのは、なかなか難しい。柔軟で調和のあるセンス、知性と感性が裏打ちしあったバランス感覚が求められている、といえよう。自分を生かしながら、周りの人々をも生かす、質の高い自己実現とは何か、知識を相手や状況にふさわしく、いかに生かして用いるか、われわれは知識を知恵にたかめることを問われているのである。

(大正大学教授)

御法語に聴く

天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし、このたび弥陀の本願にあう事を。

【一紙小消息（黒田の聖人へつかはす御文）】

阿弥陀さまの本願に、やっと今出会えたことに、天をも仰ぎ、地にも臥すほどにお悦びなさい。

臆病にサヨナラ、本願は今ここに

その日は全国的に大荒れの天候となり、長野も朝から強風と大雪に見舞われた。ここに来てから十数年、初めて経験する強烈な降り方だった。

その夕刻、私はある母娘を車で送ることになった。ご自宅へと続く小路の前で母娘を降ろし、来た道を戻ろうと車を方向転換させる場所を探した。しかし見慣れたはずの風景が一面の雪原と化している。どうしようか思案していると、お誂え向きの「更地」が目飛び込んできた。そういえばこの辺は駐車場のはず。ここならばと車を進めた。雪の夜のこと、車をバックさせながら車道に出るのもいやなものだ。駐車場の中で向きを変え、頭から車道に出ようと考えた。そして今少し車を前にと、ほんの少しだけアクセルを踏み込んでみた。

それがいけなかった。車のフロントが少し浮き上がり、間髪も入れずに今度は沈んでいった。反射的にギアをバックに入れるもののエンジンばかりが音をあげる。焦燥感が走る。車を降り、様子を

に前輪に近づく。二歩、三歩。しかし四歩目は雪にどこまでも沈んでいく。脳裏に広がるのかな畑の風景。その当たりは確かに駐車場であつた。ただしそれは車体の中央部分までの話。前輪は駐車場と境を接する畑の上に至つていたのだ。畑は駐車場より五、六〇センチ低く段差をなしているが、車止めがあるだけで柵がない。私は駐車場から畑に向けて、車の前輪を左右とも脱輪させてしまったのである。

進退極まりないとはまさにこのことだ。こんな事態では、嘆いてみても始まらない。自分一人で車を引き上げることなどすでに絶望的である以上、今できることは助けを求める他にない。

けたたましいエンジン音を不審に思つてか、幸いにも件の母娘が戻つてきて下さつた。姿を見るなり私はこの窮状を訴えた。すると奥様は留守のご主人に代わつてと、隣家のご主人を呼びに行つて下さつた。見ず知らずの方と車を引き上げる試行を重ねるうち、件のご主人も帰宅した。人が集まれば経験も智恵も集まる。結局、

車体を左右双方からジャッキで持ち上げ、後部座席に何人か乗ってもらい重心を後ろに置いたところで後輪を駆動させ、我々はついに車体の引き上げに成功した。言い様のない安堵感に体中の力が抜けていく。それは未知なる善意が何の前触れもなく突然そこに現れた瞬間でもあった。初めて出会い、そして今後そうそう出会うこともない方に、厳寒の雪の中を汗が出るまでお助けを頂いた。打算のない清らかな空間を体験したのであった。

通りすがりに脱輪した車を引き上げたことなら私にもある。別に喜んでもらおうとか感謝されたいとか、そう思ったわけではない。ただ放っておけなかった、そういうことなのだ。「刹那の善意」に衝動的に駆り立てられて、ということだろうか。

しかし、いざ自分が進退極まりない窮地に立ってみると、たとえばそれが他人さまの衝動的な行動であるにしろ、私にとっては、それがなくてはならない、かけがえのない救済であったと言える。だから私はその刹那の思いを、敢えて「善なる衝動」と呼びたいので

ある。

ところで、かつて世自在王如来という御仏のもと、法蔵という修行者がいた。彼はもともと一国の王であつたが、如来の説法に感銘し、国王の位を捨てて出家をし、仏となることを決意した。それにしても出家し仏を目指すにはそれなりの理由があろう。あくまで私の想像だが、法蔵は人々の困窮を見ては放つておけない、「善なる衝動」に絶えず突き動かされた国王であつたに違いない。法蔵は自らの心に衝動的に、そして刹那に湧き起る善の心を、実際の行動に移さずにはいられない人だつたのだ。衝動的な善を全うするには、いくら国王であつても凡人では及ばない。そこで如来の説法に感銘するものがあつたのだらう。これはもう仏となるしかない。そう覚悟した法蔵は、自ら仏となつて、誰もが困窮や危険を感じることなく安心して暮らせる、そんな仏の国、浄土を建立しようと誓つたのだ。法蔵は、はてしない修行の後ついにその誓いを叶えた。そして彼は「阿弥陀仏」となつた。かつての衝動を今は無限の慈悲と変え、

その御心を常に我々に寄せていらつしやるのだ。

もし進退を失うほどの窮地に立ちながら、それでも自分一人で何とかなる、自分の力で解決しようと思つているならば、それは自惚おごぼれというより、他人に対する臆病に他ならない。ときに世間では、阿弥陀さまが西方極楽浄土にいらつしやることを、古代の人々が死後の理想世界を想い描いた「作り話」「神話」と評している。しかしそれは、雪原に立ち往生した車の脇で助けも求めず、臆病にも未知なる他人の善意を遠ざけながら、ただ呆然と立ちつくしているだけのことだろう。未知なる方だろうと、立ちつくさずに助けを呼べば来て下さる。臆病にはサヨナラだ。

私たちは今、我が名を称えたならば極楽に往生させようという、弥陀の本願に出会うことができ念仏を申している。法蔵の、時を貫いた「善なる衝動」が、今かけがえのない救済となつてここにあるのだ。御仏のご本願と出会った今、体中で素直に喜んでこそ往生を願う人といえよう。

（浄土宗総合研究所 研究員 袖山榮輝）

平成十一年
謹賀新年

總本山知恩院門跡第八十六世
浄土門主

中村康隆

大本山 増上寺
法主

藤堂恭俊

大本山 金戒光明寺
法主

坪井俊映

大本山 百萬遍知恩寺
法主

大野忍敬

大本山 清浄華院
法主

江藤澄賢

大本山 善導寺
法主

民谷隆誠

大本山 光明寺
法主

戸松啓真

大本山 善光寺大本願
法主

鷹司誓玉

平成十一年
新年賀謹

浄土宗務総長

成田有恒

〒154-0017 世田谷区世田谷四-七-九
大吉祥寺

浄土宗出版室長

小林正道

〒105-0011 東京都港区芝公園四-九-八
妙定院

浄土宗教学局長

袖山榮眞

〒380-0845 長野市西後町一五六八
十念寺

浄土宗大願寺住職
浄土宗宗議会議員

神谷英敏

〒042-0922 函館市銭亀町一〇一

浄土宗宗議会議員

靈巖寺

住職 河本眞龍

〒758-0054 山口県萩市樽屋町四二
電話 〇八三八(二二)一五八七

浄土宗宗議会議員

福井豊信

浄土宗九品院住職
浄土宗宗議会議員

小田義海

〒857-1165 佐世保市大和町一八八一
電話 〇九五六(三三)七六七六
〇九五六(三三)七六八三

宗源寺

斎藤价洲

平成十一年
新年賀謹

大正大学
理事長

大田 秀三

〒370-0053 高崎市通町九〇
電話〇二七 (三三三三) 四〇〇〇

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳大学 淑徳短期大学
理事長

長谷川 良昭

〒174-8645 東京都板橋区前野町五十一

常光寺住職
淑徳学園
校長

大谷 壽雄

〒141-0021 品川区上大崎一十三
電話〇二三 (三四四一) 四九三二

京都文教短期大学
学長

伊藤 唯真

〒610-0041 京都府宇治市横島町千足八〇番地
電話〇七七四 (一一一四) 一〇一一

浄土宗東京教区教区長
光取寺住職

大室 了皓

〒141-0021 品川区上大崎一十五
電話〇二三 (三四四一) 八三八四

浄土宗神奈川教区教区長

清水 嚴矩

〒248-0013 鎌倉市材木座六十七十九
大本山 光明寺中

平成大事業勸募懇請中
御影堂屋根替大修理完成
ひきつづき阿弥陀堂新築再建

美作
誕生寺

〒709-3602 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
TEL・FAX〇八六七 (二八二二) 〇二〇二

平成十一年
新年賀謹

弘経寺住職

金田進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山

二九一二八

孤峯山 蓮馨寺

久米原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七一
電話〇四九二(二二)〇〇四三

青森教区
青岩寺

青山浄晃

函館 称名寺

〒040-0055 函館市船見町十八十四
電話〇二三八(二三)〇五七四

和歌山・西念寺

武田喬彦

〒642-0024 海南市阪井四六六

定義如来

西方寺

〒989-3213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二(二九二)二〇一一

愚鈍院
住職

中村眞道

〒984-0051 仙台市若林区新寺三十二十七
電話〇二二(二五六)六〇五七

平成十一年
謹賀新年

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山 實相寺

大松寺

住職 酒井亮貫

〒108-0073 東京都港区三田四-1-318
電話〇三(二四五)二四九四

平河山源照院

浄土寺

〒107-0052 東京都港区赤坂四-1-115
電話〇三(三五八)二六三〇

明顯山 祐天寺

住職 巖谷勝正

〒153-0061 東京都目黒区中目黒五-1-453
電話〇三(三七二)〇八一九

総本山知恩院
おてつき 運動推進部長

東海林 良雲

塩釜市雲上寺

晴雲寺住職

塚田 弘導

〒254-0046 平塚市立野町六-15
電話〇四六三(二二)二六三八

〒112-0002 東京都文京区小石川三丁目
十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)
振替東京六〇九三番

平成十一年
謹賀新年

骨仏の寺

一心寺

〒541-0862 大阪市天王寺区逢阪二八六十九
電話〇六(六七七二)〇四四四

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二一十五

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四十二一八

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二一十六一二一

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38

電話 03(3404)8447
ホームページアドレス
<http://baisouin.or.jp>

天光院

真野龍海

横浜 大光院

宮林昭彦

藤井實應著 ■ 藤井正雄編

一筋の道を求めて

— 祖師との出会い、父と子の人間像 —

A5判・並製

本文250頁

定価2,300円〈税込〉

株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0479

本誌俳壇でもおなじみの児玉仁良さんが十月、句集を上梓されました。

「木に昇る」(紅書房刊)がそれで、第一句集「春夕焼」に続く第二句集。平成二年から十年までの八年間の句をまとめたものです。

自販機のごすと後ろ枯野原

本誌掲載の句。葉書にこの句を読んだとき、ウムと思わず唸ったことを思い出します。七〇

歳を越えてなおこの若さ、鋭さは素晴らしいの一言です。

今年また口とがらせて梅を干す

軽快な諧謔。一步も二歩も引いて自分ごと世界全体をからかつてしまえる「明るさ」即ちハイレベルの知性を感じます。

老化です医者と言の葉鳳仙花

季語とはこのように使うものです、と教えられる一句。スパ

句集『木に登る』

ツとした「切れ」が巧みに効いています。

巻頭の一句「これからはけんかしないで花の旅」には微笑ましい優しさがありますが、巻末の「妻病む 七句」には辛く泣きたいような気分を共有させられます。夫婦とはこれほど深く結び合っているものなのか、愛や慈しみといった言葉を遥かに越えた真情に溢れています。

一句一句の完成度はもちろん一冊の句集としての完結性もまた鑑賞すべき貴重な句集です。

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●冬木立

〈特選〉冬木立真向かう妻の試歩の杖

上野卓誠

●毎日どこまでと距離を決めて、歩を伸ばすように努めているのだろう。今日の目標は木立のところまでなのか。寒いなど言つてはいられない、生きようとする努力がこもっているように思われる。

〈佳作〉うしろより靴音せまる冬木立

一丁田美恵

富士講の富士くろぐろと冬木立

長谷川 裕

しばらくは頭痛の中の冬木立

大畑 等

●塩鮭

〈特選〉亡き妻の好きな塩鮭手でほぐす

柴崎亮一

●塩鮭を指でほぐしては口に入れる。ほぐしながら妻が好きだったことを思う。「好きだった」でなく「好きな」とあるのは、まだ心の

中に妻が居て、彼女にもほぐしてやったこと
と今が重なっているのだろうか。

〈佳作〉送りきし甘塩鮭に夕餉かな

谷しげこ

塩鮭の塩辛い味母とゐる

安藤頼子

塩鮭と一膳飯に手を合わす

欠畑文昭

●自由題

〈特選〉釣人に冬至粥炊く岬茶屋

北川弘子

●本業でない磯釣りの連中にだろう。岬の茶
屋で冬至の粥を用意するのは、普通には珍し
いことだろうが、多分常連が多くて、冷えき
った体を中から温めてあげようという、こま
やかな配慮なのだろう。

〈佳作〉秋晴るる伝言板に文字溢れ

細田初枝

逃げる葉を箒が追うて秋の寺

増田信子

かわほりの夜なく遊ぶ阿弥陀堂

佐藤雅子

●冬木立

肩すぼめ十夜詣りや冬木立
冬木立落葉踏みゆく山路かな
つつがなく齡一ツ加えたし冬木立
諍いのある日は淋し冬木立
冬木立風の悪たれ自在にす
逆足の早き太陽となる冬木立
打ち込みし気合^ツ耐す冬木立
朝未だき冬木立待つ日の出かな
道行きて風留まりし冬木立
冬木立わが服の襟立てにけり
銀杏の葉ひとつ残して冬木立
冬木立雲どんどんと峰に消ゆ
冬木立葉裏葉表見せながら
抜きつ抜かれつつしか暮れて冬木立
谷の道日の透きとおる冬木立

●塩鮭

熨斗付けて塩鮭が行く歳の暮
つり下げし塩鮭の涙の辛きかな
塩鮭の塩辛い味母とある
塩鮭の眼に一日を否定さる
塩鮭にあがりかまちで挨拶す
塩鮭のつるされてをり獺祭國
くわえられ塩鮭の顔迷走す
塩鮭をさらし灯明少し揺れ
塩鮭や途切れがちな三年日記
塩鮭が塩吐いてゐる楕円かな

中島一子

上野卓誠

山本美代子

佐藤雅子

佐藤雅子

細田初枝

大場清

大場清

大場清

藤本順子

浜口佳春

山口信子

石原新

松井勝

中島一子

山本美代子

安藤頼子

大畑等

近藤十四郎

近藤啞々砂

近藤啞々砂

長谷川裕

小野富美子

芦名宗一

塩鮭や路地のポンプの濡れ具合

塩鮭が幾何学模様なす浜辺

塩鮭の小さき切身老の膳

塩鮭を捌く手先の母に似て

吊るさるる塩鮭の貌いと失り

塩鮭懐かし病院食の薄き味

百号の塩鮭寝たる絵画館

記念日の塩鮭茶漬薄化粧

塩鮭の薄いつり身の皮を食む

塩松ひ塩鮭売らる旅の朝

●自由題

新春の宴のあとにある孤独

父の忌に供ふ新茶の湯気香る

秋日和妻りハビリの車椅子

屍となりし蝙蝠弥陀の前

行秋を鈴鳴り渡る行脚僧

ガバデイのことなど知らず望の月

身に沁むや引越し荷に積む感謝状

風化佛枯れたる山に日を拾う

金賞の名札傾き菊枯るる

手焙りに干物焼きをり露天商

暮れてきて背の闇怖し浜焚火

土塀の剥落隠し掛大根

日々に澄む深みに鯉の冬籠り

冬立つ日結願の軸完成す

菊ほめる度に主人が外に出て

朝日射す障子に鳥の影よぎる

植田規夫

井口吾朗

佐藤雅子

佐藤雅子

細田初枝

川島早苗

弓谷美紀

昭島由香

斎藤辰典

井村善也

山本美代子

上野卓誠

上野卓誠

佐藤雅子

佐藤雅子

細田初枝

細田初枝

細田初枝

北川弘子

島谷ときを

平川とおる

小林惠美

大村和代

増田信子

西井正

第五回 浄土誌上句会のお知らせ

季題

春隣

はるとなり

仏の座

自由題

×切・一月二十日

発表・『浄土』三月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

●いずれの題とも何句出しても可

●特選各1名・佳作各3名

応募方法

葉書に俳句(何句でも可)を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

☆まちがいはいは7ヶ所あります。



まちがいさがし

答えは62ページにあります。

好評
発売中!!

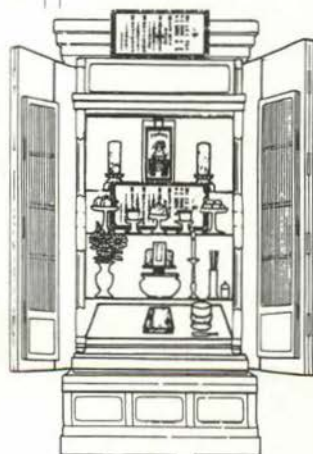
お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。

堂内用、境内地用等、寺院仕様もございます。



寺院名が入ります。(版代別)



定価：大 (32.0×18.3cm) 735円／小 (27.3×14.2cm) 420円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



去年今年ノストラダムスで酒を飲む

岱潤

今年の七月は十六世紀のフランスの医師ノストラダムスが、地球滅亡の日と予言した年である。彼の書『諸世紀』によれば、一九九九年の七月の月に恐怖の大王が空から下りてきて、この世界が終わることになっている。いよいよだなぁと思われている方も多いかもしれない。まあ八月になったら乾杯でもして酒の席の話題になることだろう。それはともかく昨年十二月初めの新聞で、驚きの数学が発表された。現代の小、中学生のなんと三割の子供が、日の出、日の入りを見た経験がないという調査発表である。これはテレビゲームなどで家にこもりがちな現代っ子が、自然体験がないことの証明ということだけで扱われていたが、私は日の出、日の入りを見るということは大変な宗教体験であると思う。観無量寿経の「日想観」を持ち出すまでもなく、日の出を見たときには欠かせないものだし、日の出を見たときに思わず手を合わせてこうべをたれるのは、信心の深い人に限られたことではない。

今話題になっている五木寛之氏の『他力』にも、氏が日の出を見たときに思わず「ナム・アミータ」とつぶやいたことを告白され、自分を越えた宇宙からの大きな波動を感じたと表現されている。信仰をもつにはどうしても体験が必要であり、その意味からも日の出、日の入りに遭遇することは貴重な体験であると思うのである。

天野莫秋子に「初日出て直ちに西の涯照らす」の句があるが、平成大不況、世の終わりに縮こまるより、宇宙の大きな力を感じたい。

(岱潤)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
齋藤晃道
村田洋一

井原法正
佐山哲郎
問川彰道

編集顧問

大室了暗

浄土

六十五巻 一月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十年十二月二十五日
発行——平成十一年一月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所——株式会社 シータイイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四一七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三・五七八・七九四七

FAX〇三三・五七八・七九三六

振替〇〇一八〇・八八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害ならせ



民家近し、静かに



足元注意



踏切あり



非常口



放火 禁



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわるな



割れ物注意



安全第一



歩行注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

ご注文・お問い合わせは
法然上人鑽仰会まで
電話:03-3578-6947
FAX:03-3578-7036(24時間)

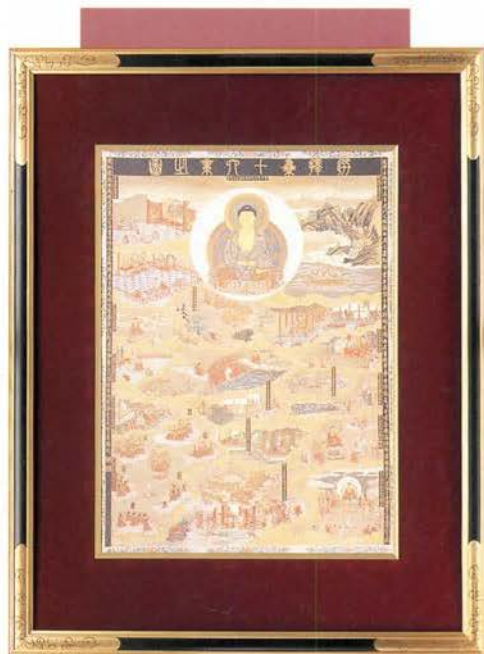
※詳しくは本誌69ページをご覧ください。

お仏壇用
宗旨布教額も大好評
発売中

大(320×183mm) 7 3 5 円より



小(273×142mm) 4 2 0 円より



遂に
完成

選擇集がよく解るお絵解き
選擇集十六章之図

布教用グッズとして
念仏の教えを語るのに
最勝の選択

本堂・客殿に最適 豪華額装入り
(585×465mm)
頒価20,000円(税・送料別)
解説書付き

※お届けまでに四週間ほど
かかる場合がございます。